

(11-③) 事業名 畜産物等有害物質総合調査事業

現状分析	<ul style="list-style-type: none">・ 飼料作物・畜産物の汚染実態調査として概ね妥当な取り組みと考えられる。・ 測定試料の代表性はどうやって検証するのか。
実施目標の達成度	<ul style="list-style-type: none">・ 実測分析データを取るという点では、所期の目標は達成されたと考えられる。
具体的改善点	<ul style="list-style-type: none">・ 特に畜産物（食品として健康影響に関連する）の摂取からみたリスクアセスメント的な評価をきちんと行っておく必要があるのではないが。
その他	

(1-1-④) 事業名 農業用施設等有害物質実態調査事業

現状分析	<ul style="list-style-type: none">・ 農業用排水路の水質と底質での濃度分析調査として、概ね妥当な取り組みと考えられる。・ 賦存実態と移動実態の解析の関連はどうか。・ 移動実態を調査するとの課題についての具体的な進捗はどのようなものか。・ 14年のモデル水路関係については資料の添付なく評価できない。移動実態を調査するとの課題についての具体的な進捗はどのようなものか。
実施目標の達成度	<ul style="list-style-type: none">・ 実測分析データを取るという点では、所期の目標は達成されたと考えられる。・ 賦存実態調査は実施されているが、防止技術の確立への対応はどうか。・ 実施目標の達成度は順調・ 実測分析データを取るという点では、所期の目標は達成されたと考えられる。
具体的改善点	<ul style="list-style-type: none">・ 農畜産物への取り込まれるプロセスの解析が必要である。・ 発生メカニズムにも目配りした調査に。・ 移動実態の解析等に当たっては、環境省データとの総合考察を含め、有効活用できるデータの蓄積が重要である。
その他	

47

(12-①) 事業名 内分泌かく乱物質等漁業影響調査

現状分析	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内分泌かく乱物質、コプラナーPCB含めたダイオキシン類の魚貝類に対する影響を調査した。具体的にはシロギス、イシガレイにおいてはフタル酸エステル、ビスフェノールA、エストロゲン様物質、クロアワビ、サザエについては有機スズについて調査を実施した。コプラナーPCB含めたダイオキシン類については、スズキ、マコガレイ、マアジ、シラス類において調べた。調査は海洋生物環境研究所等に委託して実施するとともに、水産総合研究センター、都道府県及び漁業関係者と連携した。 ・ ポジティブコントロールがなく調査としては難しいものであるが順調に行われたようであり、魚介類の影響実態把握については、概ね影響が認められていない結果としてひとつの知見を得ている。 ・ ネガティブデータが大部分であるが、バックグラウンドの意味で貴重。 ・ 一方、海産生物を用いる生物試験法の開発という並行実施分については何をどのようにして、どんな手法を確立したのかを明示すべきである(実態不明)。 ・ 実施目標は「有害性評価を行う方法の確立」であるが、試験方法の開発に留まっている。
実施目標の達成度	<ul style="list-style-type: none"> ・ 14年度は、内分泌かく乱物質による異常は見られなかった。 ・ 方法論の確立にはもう少し継続が必要である。 ・ ポジティブコントロールがなく難しい実験なので、今後は化学物質影響でなく魚介類が変化する要因等も調査していただきたい。 ・ 生物試験法の開発に関する状況をいま少し明確に報告すべきである。 ・ 内分泌攪乱物質の水産資源の再生産に対する影響解明のために魚、環境中化学物質の調査がなされ、知見の集積が得られ、目標は達成されている。
具体的改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「評価方法の確立」に至っていないのは各年度の課題設定に問題があったか、極めて難解な課題であったと思われる。 ・ いわゆるフィールドワークから得た知見を解釈するための海産魚介類の生態や生理学に関する基礎的知見の集積のいっそうの推進を望む。突然変異型の「異常」や生理的な変動範囲内の「変化」など、野生生物の変化を短絡的に解釈することのないようにしていただきたい。 ・ カレイのように「変態」する魚類の生理の理解はどこまで進んでいるのか？エストロジェニックな作用をもつ化学物質(マスコミを騒がせるような?)を調査することの意義付けは明確か、発生分化にかかわる野生動物の内分泌系の知見をベースにした対象物質の選定を行うべきではないか。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2002年11月のSCOPE/NIJACシンポジウムで野生生物に関する「生理的な基礎知見」の収集の必要性が研究者によって改めて主張されており、IPCS(WHO)の包括評価報告書でも同様の主張がなされている。

(12-2) 事業名 ダイオキシン類等漁業影響調査

現状分析	<ul style="list-style-type: none">・ 実施目標に対しおおむね妥当である。・ Co-PCB を中心に汚染実態の把握（分析）に留まるレベル。・ 魚介類への蓄積メカニズムの検討についても着手した段階にとどまる。・ 削減策の提案への道筋を報告書で明示すべきではないか。現状では、移行・蓄積といった断片的な検討にとどまり、魚介類の生物学的特性の考慮、排出源の推定などの総合的な対策方策についての具体的な姿が見えてこない。
実施目標の達成度	<ul style="list-style-type: none">・ かなりの成果を得ており、目標をほぼ達成している。・ 実態把握にとどまるが、所期の目標は達成されているものと考えられる。・ 日本人の食生活における魚介類の存在を考慮すると、リスクコミュニケーション的な説明や安心感の醸成に資する取り組みは重要と考えられ、その点では評価できると考えている。・ 魚介類中のダイオキシン類濃度が測定され、生物濃縮についての知見も得られ、成果目標は達成されている。
具体的改善点	<ul style="list-style-type: none">・ 難しい課題かと思うがダイオキシン類削減に至る道筋を明確にすべき。新たな汚染発生の防止をイメージしているのか？この削減方策と蓄積メカニズムの解明との関連が明確ではない。現状のまますすめて、実態調査だけで終わるのは惜しい点懸念される。・ 小規模のモニタリングは継続する価値がある。
その他	<ul style="list-style-type: none">・ 魚介類の Co-PCB 蓄積のメカニズムを明らかにして欲しい。